

朝夷巡嶋記

第五編
卷一

13
704
21



門遠 13
叶 704
卷 01

曲亭主人編輯 壬午孟春發兌

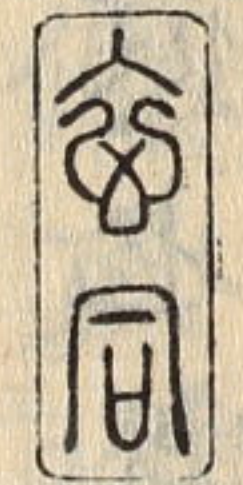
朝夷巡鳴記

榮才五編

豐廣繪畫 書肆文金堂梓

明治二
十月九日
購

朝夷巡鳴記第五編叙



古人云千金裘非一狐之腋豈唯狐腋之
集以大成之而已哉設夫移萬鈞之鼎鼎
於千里之遠獲無數之糧食於一秋之畝
者素非一農一夫之力也好著書者亦復
若是左思之賦一編十稔而脫稿猶且不
遲之然况於著書數百卷乎非一朝一夕

朝夷巡鳴記第五編叙

之苦心可知也。余少時謬驩稗說傳奇。因
 試發新研。則書肆誅求。陸續不絕也。至今
 三十有餘年矣。其所著無慮二百四五十
 種。唯以這無用之技。纔給旦暮耳。韓氏所
 云。動而得謗。名亦隨之者。歟。生平所學未
 嘗施之于人。燈下戲墨。奚使造此極耶。
 天乎命乎。抑自作之之愆也。既已知其非
 欲已不可得。顧余性也。僻不好為人師。不
 媚附勢利。敢欲俾吾神遊於無何有鄉。則
 捐之又何為哉。此余所以不能廢斥小說
 傳奇也。是書曩所著者若干弓。爾後屢繼
 編而至第五篇。刻成之日。即以是言為序。
 文政四年玄月中澣。書于神田守忍庵。

飯台 曲亭主人



朝夷巡嶋記全傳後輯第五編總目錄

第四十一條 徒然捧三昧 別路日本寬

第四十二條 泉川邊祭文 卅一字遺書

第四十三條 驟雨長唐櫃 新關小袋阪

第四十四條 尼御殿流言 衆議廳讞獄

第四十五條 孝友亡命人 新參老實僕

第四十六條 鎌倉糟漬鮑 高野年魚鮓

第四十七條 邁遭矢口渡 出尾拏絆繩

第四十八條 今果名對面 新鬼新尼送

第四十九條 諏訪嶺材狼 照射山狒狒

第五十條 莊官林淫女 山蛭橋殘獸

本編五卷總目錄終其第四十條以上總題
目見每編首卷繡像之右

鎌倉執權
遠江四郎平時政



むけもたふか
むけは後平多
物おのひ
いふみくれせ
いふそくし

東奥軍監
佐味竺内高利

玄同菴

よはくろやけくそ怪報乃
そのそあよほくぬ事とえぬ
玉川の年魚

野々原



守戸局

漁夫
浦二郎

稻毛太郎
重平

とま
ふら
らる
みね
みね
みね

ととあき
む久
あし

直亭

神前供物之符

湯嶋沸太郎
基連



浪人

軒松妻三郎

礼地水火風塵

志結ふ心
ゆるみ
ゆるみ
ゆるみ
ゆるみ

著作堂

盆九郎女児
山路





仁田四郎忠常

とけい 福を
やまのたか
まのたか
まのたか

閑井

北佐柄平太胤長



血山盆九郎
高盛

あまの山も
こらあひ
あまの死
狂齋

北越
山中
梯々

列傳姓名追加畧目

武臣 比企判官能負

荏柄平太胤長

仁田四郎忠常

稻毛太郎重平

和田新左衛門尉常盛

家臣 橋間苦六

湯嶋沸太郎基連

職役 皿山盆九郎

漁夫 浦二郎

婦人 守戸

山路 兼五卷

浮浪 軒松妻二郎

通計十二名

初編より第四編迄の姓名畧目

是編第三第四兩卷。厥人竊工茂如作者面目者。為不敷矣。非但亥帝魯魚之誤。或恣削去傍訓句讀。或盡蝕漢字補之以國字音訓錯紊狼藉不可言。余辱稟先生之囑。雖校正其失。而未能與稿本無異同也。敢請看官察諸。 櫟亭琴魚識

朝夷巡嶋記全傳第五編卷之一

東都 曲亭主人編輯

徒然の棒三昧

後輯第四十一

別路の日本魂

とがのやんとみあつた。むむひのあまのうらやま。多賀藏人光仲の朝夷三郎義秀を對面して。送は意中を告る程。義秀亦廣綱の人を知ると大くこを光仲を圍揚る。識量と感嘆し且蒙二郎孝と義の志空うを故主を佐けく時夏を撃く。勸也とあつて登て已ざりけり。かくくその日も暮まければ光仲の席を更く酒食を義秀小勸る程。義邦の廣光して筐姫を召よつ當下姫の良人とも小跪坐つ義秀もあ對ひ朝夷ぬ鬼神不測の武略まあり俺們夫婦分鏡の契を全うするのな。幸ゆく會替の恥をも雪ゆる再生の恩何を更く今あり答侍らんと

辞存くひ被く立く拜坐てむ感涙衣領を潤せ廣光繼忠亦も
 武詮昌之も主の後方は額つたて又もむを述する義秀の處に義邦
 夫婦を扶起しく舊席に推居つて何重をいりやん刻頸の交り骨肉中
 増はとあり一臂の力も思ひよすやあるあま親友主後の姫の
 冠者共侶は平だく相譚あて叮嚀も慰め慰られつ志をひいと與は
 勇士の交り團居は宵綾錦たも惜れ夏の夜の甲斐秋と冬は深まり
 程は光仲の厨川没落の爲体を廣綱は報んとてあつたて下河邊
 高吉ふもあつたて又義秀もあつたて對て某の翌早やく佐味を
 共進登く厨川へ赴くべし此度死徒の誅滅はとて和君の援は成まり且
 案内者のあつたてあつたて再びあつたてあつたてあつたてあつたて
 案内者もあつたてあつたてあつたてあつたてあつたてあつたて
 突あつたてあつたてあつたてあつたてあつたてあつたてあつたて
 生拘措つ今も三尺の童子を遣はすも妨がし且彼處へも捷徑を
 地圖ありて分明にえりて進退あつたてと辞せし件地圖を
 與へ光仲の強ていふと恭しく地圖を受て義秀の爲に臥房を備け
 義邦夫婦を退して佐味高利共侶は地圖を披きく方位を考へ再び部
 程は短夜を明し光仲則城戸四郎武詮水草太郎五昌之も士卒は百
 五十名を高く高利も厨川へ赴くはあつたて道はあつたて日や彼處
 著まけは就て柵中を巡檢して生虜の索する方土民もあつたて彼此の里
 老と召する年来経任負持ボが暴暴の趣を問勘るはあつたて経任が根城
 られは兵糧も夥あり鐵材衣裳調度も物とて乏しくあつたて生拘の賊徒の
 中持は克惡の兵十餘人と誅戮して他先非を悔て武徳は懐た良民と
 願ふの外濱へ追放して亦多く殺たて遂は庫倉を閉て賊乱もあつたて

土民ホの分とて、其の窮乏と賑ふれば高利竊とれど制めて大将置ま
 平泉の経任が兵糧を上民ホとて、今又あは積貯る兵糧と捨く
 鎌倉へ物ひろくも齎せむ執権のてう歡喜死且彼人の時政と執疑る陽
 施すと喜べども陰中貪りて飽とや。あはあは後とあは宣つんと
 正首と諫ると光仲聽くと頭とて、掉り軍監の意見寔は是し某もそのと
 其のあはあは、つと六郡の民この年来賊乱より耕作の便と後
 とこれへ或の妻子流亡一見孫凍餓せむの稀あり。あはあは賊誅滅
 多く民の飢渴と拯むはれを経任と亦何の差別あり。倅の趣を鎌倉
 せえあげて台命と送りのあは其往返は日と費して輟射の意と拯
 由く再び乱と招くの基欽大将既よ外は在りて、勅命も送るは
 この後よあはく罪蒙るとも某一箇の身と殺して千萬人の危窮と拯む
 恨むべきはあは、この賑給は民肥くみか国恩と戴ふ鎌倉殿の頼
 しが私に似く私に似くはあは、答は高利あり感佩と再び禁め
 既に光仲の倅送るは、擬て速に下知を傳へて厨川の賊柵と燔亡し
 一字の送るは、遂に帰陣よ赴け、土民ホのあは安堵して萬々歳と揺ひけ
 案下某生再説義秀の早熟睡して光仲高利が厨川の柵へと赴くと
 足も送るは、斬るはひらり覺る亭午の比に起るは、外面騒るは、何
 ありとて、端のてう、雑兵ホ五七人、突立来てとて、
 置つる鐵撮棒と戯ると揚ると、三入の本を把り四人の末まをわけ、面
 赤やふ曳声合くと、絶て揚らば又彼此より聚ひ来て立ち入り
 替り入の増せども、甲斐あはと笑ひ、其のあは、義秀のあは、
 あはあは、その棒とて、あは、措くとあは、は、と、あは、果

右をよびく撮むが如く提て何処へ措くともん入る衆皆呆れて舌を吐
 ちてあつち長八五尺重の四五斤もあつちん八角の鍛倣る鐵の棒を
 ちりげよるまよりあつち大人の臂力の揃ふへは鬼神をもとらへく今
 これをも推して経任の亦悍きものちり山も抜くべれども器械取て甲乙
 あり大入及べれはと立地は撃れども大人の大刀をちりまのちり又棒のよとを
 ちりいとも與あつちかんと辞ひとしく請促せよ義秀をちり頭は汝達を
 知んぬの任任の棒をちり渠の棒を使ふともあつち力は過えれはちり腕
 衰へ遂は首を喪ひぬ大約戰場は臨むのちりちりちりちりちりちりちり
 襲の量も過る器械と好むのちりちりちりちりちりちりちりちりちり
 これをも経任が臂力の際限とあつちのちりちりちりちりちりちりちり
 ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
 ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

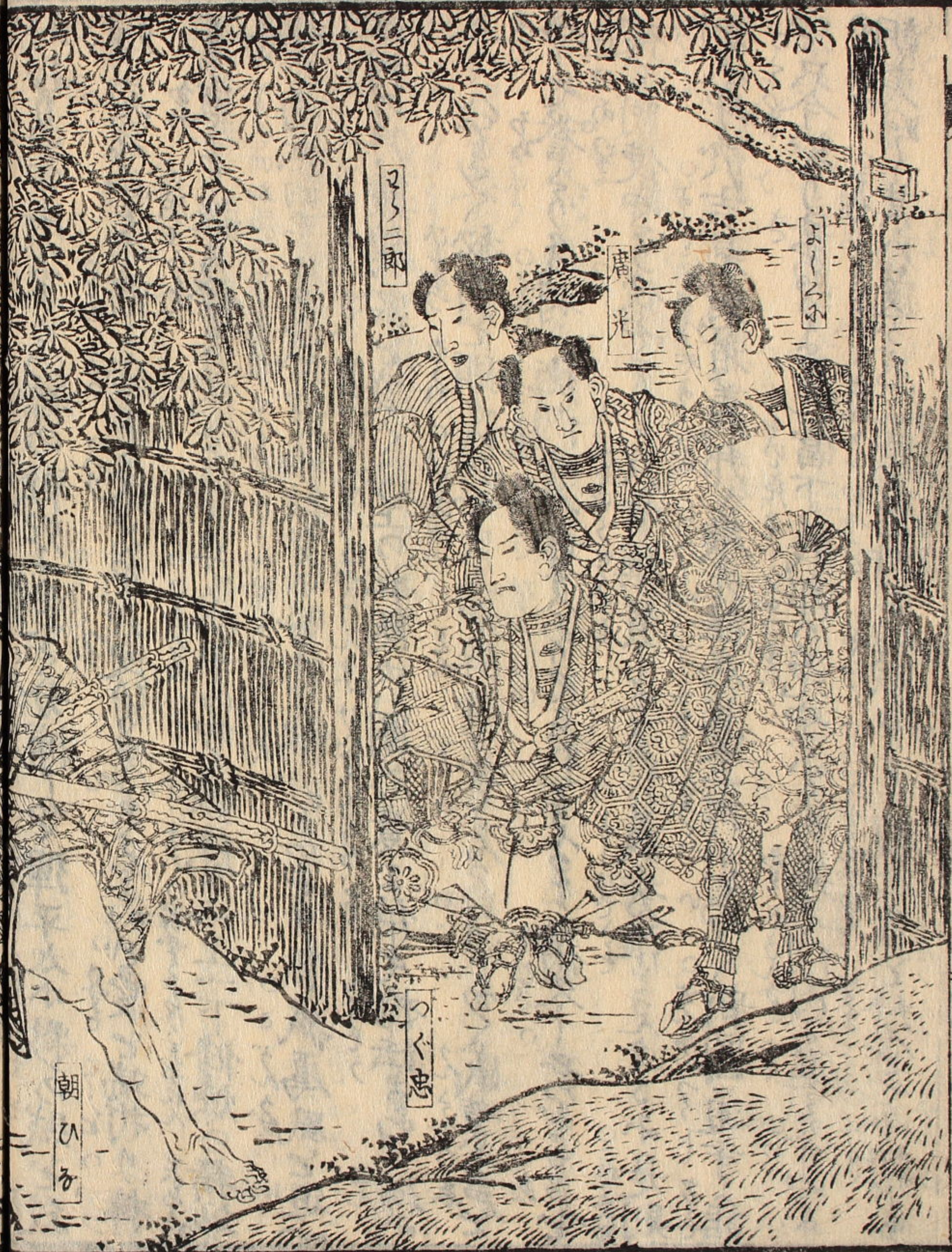
好むのちりちりちりこの棒の軽な愛と分捕りて彈平太の影の賊と殺
 弾ぬのちりちりちり使へとちりちり使ひもせんよかちり裳と端折り棒
 ちり直と扱縁より閃りと外立水車の如く振鏡を一上下修煉の精妙
 初の高底四平の勢或は穿袖披身の勢法は稱びといふちりあつち孤鳥風と追ふ
 江村の月雙鶴雲を凌ぐ沙上の松園内園外意は任と槍法もあつち神
 入のちりちりちり秘術と頭せば兵士のみを酔かちりちり目いともあつち感嘆の声を
 合へちりちりちり時衡門の外は入あつちこれとちりちりちりちりちりちり
 被て阿使をちり使をちりちり只管稱賛してこれに義秀誰とええちり是則
 別人の吉見冠者義邦の廣光継忠蒙三郎もあつち新圓通寺の詣
 ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
 ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
 朝夷の某の篋がなる感應持は灼然ありちり觀世音を拜んて今朝も

武備と論
一七 義秀
鐵杖と使



月夜に備卷一

朝夷五續卷一



朝ひを

口二郎

唐光

つゝ忠

解とくぐり。され地圖ちづを失うひいつつやも志あはら本海道ほんかいどうをかり来つる。日ひと費つしる。たらしと義邦ぎほうをかく彼桃源たへんと究まり。是再またび其外ほかは適んとせし。その路みち竟つはる。もとの故ゆゑも誣ぐ。かく朝夷あしやを資ける。衆しゆ賊ぞくと一時ひとときは七。あひ観音くわんおん薩埵さつていの利益りやくを又今いまに議さる。されば経任けいじんが餘黨よだうの籠こもり。厨川の柵さく落おちて後彼地圖たいていの失うせし。これ佛ぶつ陀だの方かた便べんだんといは光仲くわうちゆう高利かうりも寔は然り。忘る義秀ぎしゆがち領りやうだの條じょうの應驗おうげんの疑ぎふきまり。燈とうの靈佛りやうぶつのて義秀ぎしゆを愛して祐けし。のなんや是こゝれ人の忠魂ちゆうこん義膽ぎだんの致いたす所克く賊ぞく當あたり滅之めつ。死し時とき到いたるふよりてかる應報おうほうあり。諺のいふを鬼おにと信まん。の謀まうと失うひ日を擇むの時ときと喪うふよふ神仏しんぶつの奇特きせきと頼たのむ愚夫ぐふ愚婦ぐふの所為しよゐめと武ぶ士しさる。の恥べの秋あき努ぬ技ぎ露ろをくばら。衆しゆ皆みなの見識けんしきの卓たつは感服かんぷくあり。且と高利かうりの光仲くわうちゆうに對しての事こと克く賊ぞく全ぜんく滅めつびら。某たつ先せんと鎌倉かむらへ還り。經任けいじん時とき夏なつの首級くびかきと獻けんして且諸將しよしやうの勲功くんこうと注進しゆしんせら。多おほく準備じゆんびを入し。の光仲くわうちゆうの殘ざん後ごをみづく。二に通つうの呈書ていしよを写り義秀ぎしゆ義邦ぎほうの勳くん記きをと士卒しよその功こうを記し。けく下河邊かへん小三郎せうざう高吉かうきちを高利かうりと鎌倉かむらへ遣はらし。と倅せの趣しゆと廣綱かうかうを告ぐ。と高利かうり禁かむり。と其その往むか返かへ時とき日ひ移うつり。と益えきや某鎮守府ちんしゆふへ立り。と廣綱かうかうの對面たいめんせ。と彼かの処ところの事ことも分明ぶんめいなり。時後ごれ。と怠たい慢まんのいん外口ぐちと脱だつる。と明めい曉きやう既陣けいじんを入れ。と只ただ願ねがふ。と義秀ぎしゆ側かたより軍監ぐんけんの意見いけん究きゆうせら。今いまと思惟しゆいは。と彼かの經任けいじん時とき夏なつの首くびを鎌倉かむらへ進め。と既すでに四月しげつの下旬しゆげんに漸く温暑うんしよふ。と道みち中ちゆうに腐爛ふらんせん。と面めん目めと損そんぶ。と尤なほ送そう恨えんのうち。と究きゆう竟けいの物ものをあれ某餞別せんべつといふ。と腰こし著ちやくの印いん箆へいを

解とくぐり。され地圖ちづを失うひいつつやも志あはら本海道ほんかいどうをかり来つる。日ひと費つしる。たらしと義邦ぎほうをかく彼桃源たへんと究まり。是再またび其外ほかは適んとせし。その路みち竟つはる。もとの故ゆゑも誣ぐ。かく朝夷あしやを資ける。衆しゆ賊ぞくと一時ひとときは七。あひ観音くわんおん薩埵さつていの利益りやくを又今いまに議さる。されば経任けいじんが餘黨よだうの籠こもり。厨川の柵さく落おちて後彼地圖たいていの失うせし。これ佛ぶつ陀だの方かた便べんだんといは光仲くわうちゆう高利かうりも寔は然り。忘る義秀ぎしゆがち領りやうだの條じょうの應驗おうげんの疑ぎふきまり。燈とうの靈佛りやうぶつのて義秀ぎしゆを愛して祐けし。のなんや是こゝれ人の忠魂ちゆうこん義膽ぎだんの致いたす所克く賊ぞく當あたり滅之めつ。死し時とき到いたるふよりてかる應報おうほうあり。諺のいふを鬼おにと信まん。の謀まうと失うひ日を擇むの時ときと喪うふよふ神仏しんぶつの奇特きせきと頼たのむ愚夫ぐふ愚婦ぐふの所為しよゐめと武ぶ士しさる。の恥べの秋あき努ぬ技ぎ露ろをくばら。衆しゆ皆みなの見識けんしきの卓たつは感服かんぷくあり。且と高利かうりの光仲くわうちゆうに對しての事こと克く賊ぞく全ぜんく滅めつびら。某たつ先せんと鎌倉かむらへ還り。經任けいじん時とき夏なつの首級くびかきと獻けんして且諸將しよしやうの勲功くんこうと注進しゆしんせら。多おほく準備じゆんびを入し。の光仲くわうちゆうの殘ざん後ごをみづく。二に通つうの呈書ていしよを写り義秀ぎしゆ義邦ぎほうの勳くん記きをと士卒しよその功こうを記し。けく下河邊かへん小三郎せうざう高吉かうきちを高利かうりと鎌倉かむらへ遣はらし。と倅せの趣しゆと廣綱かうかうを告ぐ。と高利かうり禁かむり。と其その往むか返かへ時とき日ひ移うつり。と益えきや某鎮守府ちんしゆふへ立り。と廣綱かうかうの對面たいめんせ。と彼かの処ところの事ことも分明ぶんめいなり。時後ごれ。と怠たい慢まんのいん外口ぐちと脱だつる。と明めい曉きやう既陣けいじんを入れ。と只ただ願ねがふ。と義秀ぎしゆ側かたより軍監ぐんけんの意見いけん究きゆうせら。今いまと思惟しゆいは。と彼かの經任けいじん時とき夏なつの首くびを鎌倉かむらへ進め。と既すでに四月しげつの下旬しゆげんに漸く温暑うんしよふ。と道みち中ちゆうに腐爛ふらんせん。と面めん目めと損そんぶ。と尤なほ送そう恨えんのうち。と究きゆう竟けいの物ものをあれ某餞別せんべつといふ。と腰こし著ちやくの印いん箆へいを

檣撈て一包をとりてこの虫法の薬水を用ひての薬劑之某肥前の瓊浦ふ
 ありしに浮槎道人よりこれと獲りてこのをりて水を加えて物を浸しかくたひ
 年を経ても色も変らば腐爛と絶てずこれを以て彼首と浸し
 齋一まへ。この光仲高利ハ依然とて菜劑を受くやとて包紙を
 披ひて齊しく等しく飲入往治五年閏四月初豫州義程
 高館を撃れり泰衡則との首級と際畚を納れ酒を浸し鎌倉へ贈
 りて茶水やねば色も変り且焼首ありれば真偽定るなりと今ふ
 りて豫州ハ大功ありて逆意を諷者の舌も傷られ終つて
 正とてけり兒をやら泰衡ハ相謀て首級を浸す。酒とてけり況任仕時
 夏ハ暴逆の賊首とて今天誅と加え首級を獲りこれを鎌倉へ進めしと
 温暑の爲は損らるるやわんと豫よりあるふわねむか奇菜のあり

べといひてけり兒をやら泰衡ハ相謀て首級を浸す。酒とてけり況任仕時
 準備速に整ひて光仲ハ亦下河邊高吉ハ士卒三千餘人と謀り任仕時夏
 猛虎方相陰行負持ホリ首級を江陰一軍監は後かくてと鎌倉へ事べし
 下知つ又疾行の士卒兩人とて日鎮守府へ遣りて佐味高利帰陣の便
 路かれがその城へ立入りていれりて廣綱めを告ぐる。されば件の便と兼る
 士卒ハ遺賚路を走りて鎮守府の城へ赴り佐味内高利ハその詰且つが
 隊兵とて下河邊高吉と共に光仲義邦ハ別と告ぐる。某不憶この地を來て
 たり當下義秀ハひとり行装を整へて光仲義邦ハあり某不憶この地を來て
 一臂の力と戮せん素より名利の爲ありた同盟の義と重くと冠者と撥ん
 ぬのの兇賊既誅休と冠者ハ叢連の時刻なり今某この地を要す。そ
 るとて越路の岩上ハ友鶴産後ハ疾病あり冬より枕をぬがむと風の便ふ

其の存亡今も定むべし且友鶴が親相判五義中より貸を惜まど
 吾黨のゆゑ大なる資をかりしものありし程の何れもは女子のまじり
 愚痴ものなり志をあらはれ恨もせん歎たせん人の親も物と知りて又
 妻妾と苦ゆめ今もなやえと誰これとせむん不仁これより甚だ
 かに其の暇と賜へ若上へ迎はく聊彼を慰んむとせむりのひけく違
 立んとせむと光仲義邦左右より慌忙に推禁めりて所理り之某も彼処の
 事と受ざりてあつれども先賊亡びく餘日あり左も右も事繁く後と憐
 れ違ありたされ此度の軍功へ和君の右も守りて勸賞多しの隨かん
 凱陣は程もわつれ光仲を相伴く鎌倉とをせむに絶て久し義盛所は
 再會今を期せむとそれの時を待のや若上へ廣光おれは忠を遣て
 倅の趣と報知せんあつ鎌倉へ赴はく君父の見参入りも功名いゆ空
 しく官祿との身を潤えあつて後越路ある妻子を迎とりあつ忠孝

義信全るべしあつしむ光仲が注進も虚言に似く人功を竊むとい
 はん枉くこの後後ひあつて練れが義秀頭とち揮て西所の
 意見よとともあつて所異此度某が経任ホと駁とつて武命を
 稟せりて又大将の募に應て走加るむあつて只るが心あつて
 冠者の危窮と拯ひのとあつ功名らあつてあつてあつてあつて
 親も免る君も召れて鎌倉へ推参せばこれ只名利は走と義秀の幼稚
 と此冠弱多病ゆりて親も棄られらるもの縦越路ある友鶴ホの病煩を
 とも親の勘當免りて鎌倉へ赴はく推て彼処に赴くは是親を不
 且友鶴ホがうへのとあつて年来往方を索る養母の面を索るが心一日
 樂たつて勸懲は官途は就く母を索るをほつておのが采利は拘ひ

養育の恩を思ひぞ高位高祿も采あはらば志既決せり只今袂と分つ
 べ其処退也と敦圍る理は逼られて光仲も義邦も頻に感嘆あつるのこ又いつ
 よりもあつるより且して義邦は遙に後方と云ふより三二やあ標吉郎やあつるこ
 呼立れ折もり廣光継忠の蒙二郎と共程近き帷幕の裡に聚合しとり
 せうびも義秀の志とあはれ且驚れ且憾とぞ留めんとあ程は呼立れ
 便宜を始り奔一阿と志しく主のほうふ来まれば義邦もあつてを
 汝達彼処は在つる汝あつる倅の趣を大々いせつらん勇士の義烈は石より重
 かり今つら引留べしあれども夫婦その洪恩を受かから果敢なく別る小
 忍びて汝達二人を朝夷の俱しあはせ若上まで送れり彼地は
 到ら朝夷の彼人對面の後速に清勸やく又鎌倉へ誘引来よと
 起行の準備をせむと只管のそとを廣光継忠あつてと共侶は頭と

擡仰けけりぬ某ホの朝夷の援ありて主君の先途不幸の
 且廣光の三度朝夷の必死を救れ妻と子ども今も船向は寄宿せり
 その恩の義甚重り鎌倉も負縁り何國も送るん素ありの
 願ひあつとを義秀あはれと妹も無益の儀あり三二冠者を守
 育一第一の老黨あつる標吉郎の若黨既功成り名を遂て鎌倉
 見参の供立ぬと臣らりの志とあはれ城戸水草ありと彼に信夫の
 舊臣冠者のあつる標吉郎の若黨既功成り名を遂て鎌倉
 多ふ今義秀が故をりて主君の供を缺りわんやこの後一切後ひくと
 推辞と竊て蒙二郎の懐く幕と塞げ進む教あぬを
 省せし志とあはれと憚あつとあつる大約倅の趣は彼処もあはれぬ某
 今に要のものこの地は来つるものあり朝夷の扶助中より親の為は怨と

復せしこの恩これ莫大なり江州馬養所の送りぬくことを許されば其の俱
 也只朝夷主の恩に於て稻向ぬおも受る恩あり報恩の爲若上も俱しめ
 としけしうあつたこの錢のつどと眞実も懇懇に請求れば義邦廣光歡び
 蒙二いしむるに朝夷ぬ朝夷ぬ三入はむるの俱しめと辞を盡し
 勸むを義秀おほも兼引も蒙二郎が下野ありと来つるの故主の
 えとあつた義秀がなまわつた幸のよ年来の志を遂げれば速に故郷に
 還りて農業を就んとも又鎌倉も故主の俱しめと家の仕んともその
 外あつた今義秀を送るともこれ必要なく渠も益々某四国九州にお
 編歴あつた後者欲しとあつた後僕より千里獨行
 心をなれかかすも愚意は任せぬと言葉を放ちて推辞せん主後の困
 果て目とあつた嘆息を光仲も亦慰むるに義邦は對ひての朝夷ぬの

義勇剛正あつた感あり一旦その意は仕るも鎌倉も赴けその
 大功とせえむむ勸賞豈空しくんやそれごとこのあつた還るべくも
 あつた左右の袂は携りよ今宵一夜もぬくも由別の盃と勸めぬと
 かお君の恩もろいむと問へ義邦點頭し事みか本意はあぬとも聴れ
 ぬが志も今宵の柳笛勿論然らぬ昔もいさう送憾くせんやと
 相禪と義秀の言も訖らぬ焦燥く陣中の酒醺の後日の批評を脱れ
 婦人別と惜むる勇士の本意はあつた一日あつたあつた亦一日あつた
 下時あつたあつた亦下時心るいさなきのい果つたあつたあつた
 めとあつたあつたと衝と立ち外面とあつたあつた端近く置
 撥取てあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

整つひば葛葉三郎とて追まらるれば賢むを成りまれば蓬姫の憾をいさへ
城戸武詮水草昌之とて追まらるれば趣と後より傳へて士卒よ心か死馬奴
おのぞ惜ぬものあんちりける。

泉川邊の祭文

後輯第四十二

卅一字の遺書

吉見冠者義邦夫婦の義秀は別れより亦今も稚児の親を棄れ
心地く只鬱々と樂まば廣光は慰められ又六七日程光仲ハあの
年来賊乱は離散せし土官と里老ハと招き集りて非常と警り農業と
勸めよの掟果るる鎮守府を退れとて義邦夫婦と相伴り軍
兵送あくり率して竟る帰陣は赴く程は泉川の邊を來り折る
頃日の卯花降る水倍しく渡さくもあざれば光仲河原は馬を駐めて

悵然とて左右と見えり曩もこれの如く膠く経任が妖林は傷られ
夥の士卒と撃しりりも上六柳營の威福は依り下ハ士卒の忠戦と
りて兇賊刺滅しく六郡無為は属し今ハ公軍凱旋を妻子ハ戸は立く
企望し見孫ハ蒞庭と拂く待ん死せりとの返らば猶この河水のごとく
痛く入るあく國使は立とて存亡必ありとて死し恩賞
漏るゝの抑何の幸やある聊戦死の諸靈と祭ら準備とせよとの
がせハ士卒感佩しく河原とて死拂ひ肩夥衝累のく假祭の壇と
儲け鉢と植く幕帟と弓箭と把く非常と儼り或ハ彼此を走適く五
六種の贄と儼り緯速と整ひり其間ハ光仲ハ床几は尻とちり掛く
墨斗の毫と扱半し要時案とてとて祭文と草とてかづくこれを
捧持く壇は倚りて贄と薦め水は臨とて黙禱起請し彼祭文と

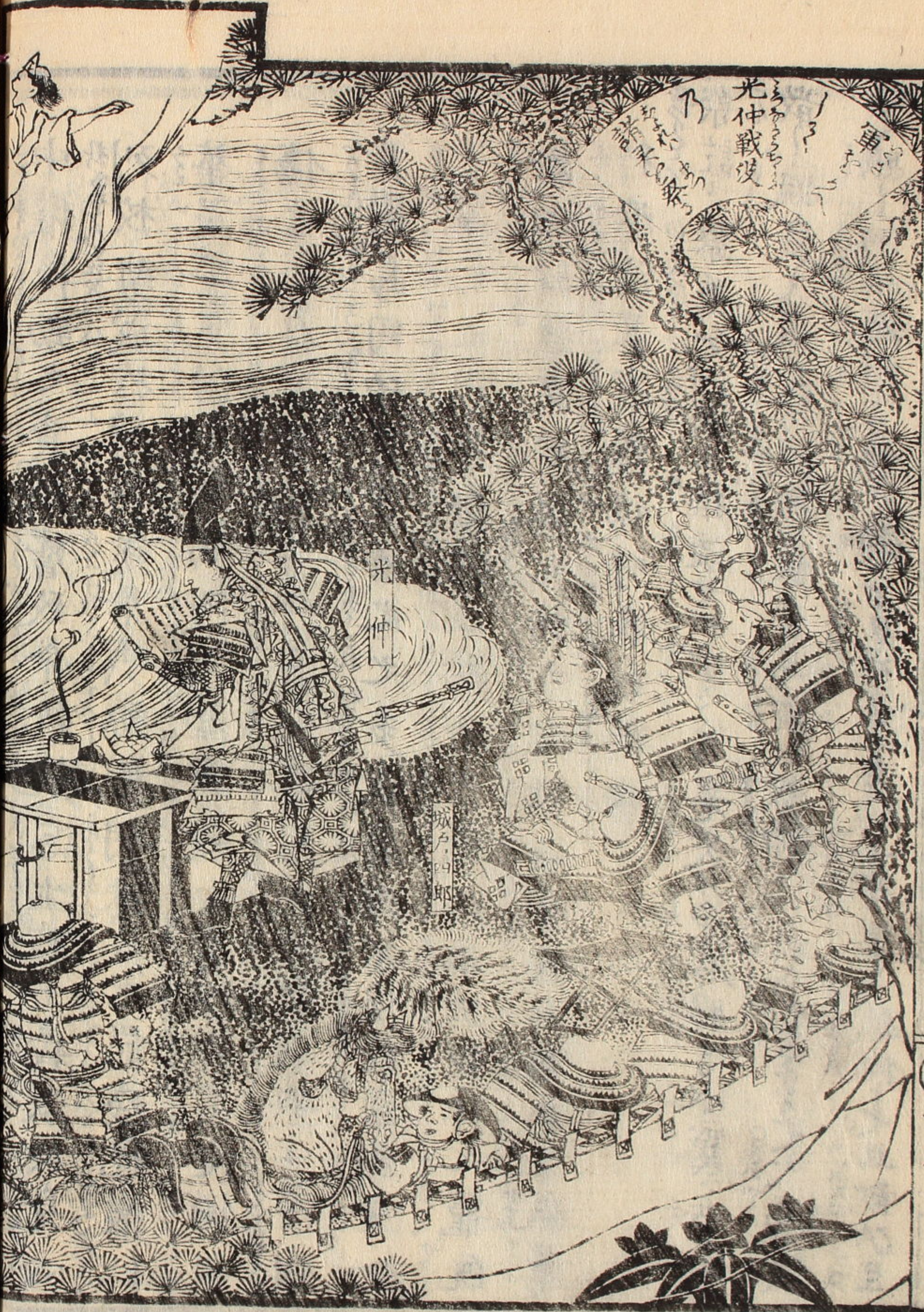
高やう讀被りその文よしく

維建仁三年。歲次癸亥。四月某朔二十九日。海東征虜
正使外六位上源朝臣光仲。昭以清酌之奠。祭陣歿戰
士諸靈。東輿之大北極天際。神勳無施。神武無制。或服
或叛。越自中葉。而名將繼升。打鎮於府城。以威服異類。
毛夷之勇。冠北倭。竟就坂上之戮。貞任之威。行六郡。終
摧源公之師。稍臣并服。漸化連眉。鴉變好音。猶且有蹤
伏舊巢者。前兇誅滅。後賊未懲。謀為翻動。者其名曰經
任。蠢爾兇渠。逋誅肆暴。逞豺聲以欺天。恣狼心而犯邊。
割彼鷄焉。用牛刀。某雖不似。然蒙恩辱。大任藉斧鉞。徂
征。伏以。幕府威靈。遠被武德。旁行當天討之時。不

中權後勁之資。拱替致命。執銳忘生。戰士義激於身心。
列校勢成於臂指。遂屠戮鯨鯢。明誅放之罰。殘獍懷仁。
華夷肇寧。因還師期。河上。莖戰歿之骨。增以賞筵。憐又
傷之肌。存其廩給。嗚呼哀哉。某司戎旅。敢欲與士卒俱
苦樂。烏同功異賞者之之多哉。惠澤不俟於崇朝。身化
于不毛之土。雖勲績以貽於子孫。尚漏於進律之籠。既
勦鋤豺狼。喪股肱之悼之深。循念榮枯。不勝悲辛。敬薦
行瘞。沈哀有餘。嗚呼哀哉。尚饗。
祭訖。祭奠と河水は推流せ。吹々々々。鬼哭の聲。朦朧と水霧と共。解
散。風々々々。蘆荻の風。陰霾と烏雲と吹拂へ。殺氣をまとい。太陽隈
あ照し。河水俄頃よ減く。瀬を見へ。士卒よく感佩し。且歡ひ。且



水島太郎五



軍
光仲戦没
乃
光仲

光仲

城方四郎

勇大將仁あり誠あり。その澤枯骨よ及び。奇特あり。異同音に稱。
 賢と隼雄の若武者。兩三騎馳く瀨踏とく。おひりより。なや浅く。なれば。惣軍
 齊一推渡して。前面の岸を登り。その。此吉見義邦の。薙姫と。轎子に扶来し。く。
 廣光蒙二部。小左右を護り。その。身も。侶も。引を。く。後陣より。渡り。馬鞭
 継忠と遣して。光仲の。おひり。と。信夫の。舊迹。高館の。山。圓山。六遠。
 一。兩日の。暇を。賜へ。某夫婦。の。立より。く。彼。七迹。を。吊。許容。あ。幸。い。と。
 叮嚀し。請せ。光仲。笑。く。一。殘。よ。及。び。せ。所。道。理。は。称。へ。り。信。夫。莊。司。の。當。國。の。
 老輩。武。命。と。仰。せ。貳。と。な。ん。これ。年。米。賊。後。と。押。へ。泉。川。と。越。し。め。り。た。れ。
 とも。孤。軍。と。の。援。を。乞。う。一。遂。は。主。後。負。と。彈。と。其。を。討。死。さ。す。り。と。惜。む。
 ば。た。の。あ。ん。冠。者。の。翁。塔。の。好。あり。為。し。追。薦。の。法。進。を。閑。久。と。欲。め。あ。の。情。願。
 勿。論。唯。冠。者。夫。婦。の。な。り。城。戸。四。郎。水。草。太。郎。五。寸。亦。も。の。君。父。と。追。慕。せん。

心の中と察し。所詮光仲も共侶。彼処より。赴。生。民。と。教導。し。て。農。と。
 勧め。且。その。法。進。を。資。け。く。忠。魂。を。慰。む。べ。と。い。は。し。と。律。の。趣。を。衆。軍。に。相。知。
 ら。又。士卒。兩。人。を。鎮。守。府。へ。遣。し。て。この。條。の。趣。を。廣。綱。に。告。め。り。これ。あり。
 先。は。姓。忠。の。遠。く。後。陣。は。退。き。く。惣。大。將。の。返。辞。云。云。と。則。主。に。報。し。義。邦。
 多。く。歡。び。き。み。づ。ら。本。陣。の。物。だ。と。光。仲。は。謝。儀。を。述。く。郷。導。の。為。先。進。び。
 光。仲。更。は。隊。伍。を。整。へ。先。陣。後。陣。陸。續。と。高。館。を。投。り。ぬ。り。移。り。さ。り。程。小。
 義。邦。夫。婦。主。後。の。光。仲。と。相。伴。く。館。の。圓。山。は。来。て。え。れ。ば。春。や。昔。の。大。厦。高。樓。
 餘。波。も。燔。失。れ。て。あ。り。と。なる。と。先。悲。し。荆。棘。の。道。を。塞。ぎ。し。鳥。樹。枝。小。
 巢。を。造。り。青。苔。の。礎。を。彩。り。て。狐。兎。の。跡。を。印。を。草。の。一。叢。の。煙。を。残。し。て。虫。
 五。更。の。夜。を。照。し。樹。の。半。幹。の。火。を。脱。ぎ。く。梟。百。丈。の。杪。は。棲。り。累。々。る。白。骨。
 夏。草。は。纏。れ。く。雨。は。洗。ひ。風。は。破。れ。織。々。る。流。水。青。塚。と。遠。り。て。白。揚。ひ。り。

肥こえりり禁こんんととのの涙なみだ生な憎にくまま袖そでをを濡ぬれれとともも絶とつつるる人ひと也なり。
 義邦よしかた篋か姫ひめのの歎なげたたとと武詮ぶせん昌しやう之の繼ついで忠ちゆう廣くわう光くわうホホハハ慨がい然ぜんとと眉まゆ根ねをを擗なりり。
 潜ひそ然ぜんととししくく涕なみだららむむ君きみ父ちちとと母はは胞わが兄あに弟あにとと母はは友ともとと昔むかしととああらら哀あはれれ。
 悼おぼれれのの憶おもひひ念ねんのの孰あやれれとと疎あやれれののああらら元晴もとあきとと首くびとと守詮しゆせん昌しやう甫ふ鳩とよ江え婿むすめ竹たけ。
 蟬せみ貫つら九く郎らうホホ名なああるるのの亡な骸がはハハ異い義ぎ昌しやう之のああららびびとと彼あららびびとと索もと求もとめめ之の。
 埋うめめららるるとと里さと人ひとホホ後のちホホ知しりりとと樹きとと植うええ標しるしととせせりりああらられれももああらら残のこるる白しろ骨こつ多おほ。
 此こ度たび義邦よしかたととくくとと埋うめめららるる墓かぶ石いしとと立たちちのの莊園しやうえんとと購かひ求もとめめららるる寄よせせ。
 香かう華けのの料りやうととせせりりかからら程ほど光くわう仲ちゆうハハ信しん夫ふ莊しやう司しがが舊ふる領りやうのの村むら長ちやうホホとと召よ聚あ合あてて。
 鎌倉かまくら將しやう軍ぐんのの恩おん澤たくとと示ししし農のうとと勸すすめめららるる法ほふ度どをを約やくとと侵せりり掠らぶぶととななれれ。
 土ど民たみホホ蕪わ食じき壺か將しやう水すいとと喜よろこ悦びのの声こゑ街まち衢かどにに充みりり又また光くわう仲ちゆうハハ義ぎ邦ぱう篋か姫ひめのの。
 為なるる布ふ施せとと資すけけけとと信しん夫ふ莊しやう司し元晴もとあきがが香かう華け院いんありりとと正せい法ほふ寺じにに。

法師ほふしとと會あ合あとと齊せいとと設しやう経きやうとと誦じゆ今いま茲こゝ二に月げつ某いつ日にち討う死しとと信しん夫ふ主しゆ後のちがが追お。
 薦せんのの法ほふ蓮れんとと開ひらくとと一いつ日にち道だう守しゆ師しハハ高かう座ざとと象しやう教きやうのの微ゐ妙めうとと譚だん聽あ衆しゆハハ廉れん擗な。
 慈じ航かうのの風ふう帆はんとと仰あぐぐ幽ゆう靈りやう速そくはは三さん東とうのの火か坑かうとと脱だつ離りとと永えいくく九く品ひんのの淨じやう刹しやくはは。
 生なまますすとと事こと終はつつ次つぎのの日にち曉ありり雨あめ降ふりりとと人ひと馬ばのの往い返へん不ふ便べんをを。
 又また一いつ兩りやう日にち逗と留りゆうととむむりり實じつ方ほうのの中ちゆう將しやうのの国こく司しとと時ときありり當あ國こく之の蒲ふ華け花けとと。
 昔むかしのの五ご月げつ五ご日にちのの旦たん未み開ひらはは光くわう仲ちゆうハハ又また吉きち見けん夫ふ婦ふとと相あ伴ばんとと鎮ちん守しゆ府ふのの城じやう赴しゆとと。
 中ちゆう程ほどははこのこの地ちのの百ひやく姓せい門もん別べつとと惜おぼししとと光くわう仲ちゆう義ぎ邦ぱうのの馬うまのの鏢りやう面めんをを携たりり放はなつつ。
 會あ相あ共きよよりりるる此こ度たび摠しゆう大だい將しやうのの武ぶ略りやく中ちゆうにに兇けう賊さく遂すいにに誅しゆ伏ふくとと復ふく天てん一いつ日にちとと。
 入いるるととををたたららりりああらられれ元晴もとあきのの村むら死しとと當あ郡ぐんはは主しゆとと吉きち見けん殿てんのの誓ちか。
 君きみ中ちゆう七しち姫ひめもも恙やああららずず願ねがひひのの冠かん者しやをを遺いしし首くびめめ之の當あ所しよとと治ちりり也なり。
 寒かん郷かうがが賢けん才さいよよ之の無む頼らいのの惡あく少せうあありりとと多おほかりり再またびび虎こ狼らうのの柵さくとと也なり。

雨をれやゆり捨しを涼しかりと一首の歌と書るはこれ紛れくもわぬ
 ひろつかあせだこれ
 廣綱の遺蹟見はつと宵償れ沈吟眉を擡め傳入の扇とるや
 多く
 云云とみ歌をわかれ今これをも推量る前司殿この年来武藏の太田は
 よよひの歌を甘しひよの隠れつ武命已とをゆて兇賊追討の大
 将を拜せられ物もこれとも光仲は譲り鎌倉は参向いどその身へ僅は副
 将とあり後見とあり既に経任七び今凱陣の時よ及び卒然とて
 三箭と損く甲冑六具忍辱の鎧は更も隠遁の志を示しあみ三十
 一字をわらんぞん如世丸えは在るなり前司殿は俱しあて共に出家ある
 りの欽渠への舉動風狂は似れども正直くと寡慾之主と教たみかれ
 俱しあひり疑ふべき功成名遂身退きよく禍の門を闔く人の為は惜れ
 らぬともこれとあつ半塗あり捨る光仲は何とあり且見く歎か想像
 あり

あまののすもつえあがば營中の沙汰も心りけ且外様へ知是く
 腹心の士卒とて部しと往方と疾索のよとせバ守直大く驚死て
 そを安うぬむを大殿の御帰城を迎なんと士卒罵り騒ぎ紛れ
 潜び望せむひびの遠くへ仰義のゆぬと回答て忙しく退治の太田の
 莊より後ひ来つ共せよのありと八方へ隊を分ち守直も亦その甲夜
 より潜るふ城をせく黒白も別ぬ阜月闇は蕉火をゆり照く廣綱の跡を
 慕く其処とも追うる程光仲は廣綱のうへとのつと
 想像りて起ても居ても安うぬ宵苦くを忽卒に告死るや嘖息の
 外をふあろの惑ひ照らをも脂燭を獨り抗う住捨られ使室の内を
 あらとあらん久ふこれ亦つ死比の筆遊あを地へく壁中も一首の歌を送し
 荒果 江刺の城を夜めくも苦みみれのそらと愛く書るる

給との恰との修羅鬪淨の巷と厭つて隠道難津の志願ありと覺る。
 只彼翁の庇を乞ふる薦揚吹舉縁縁の既の充賊七び名を揚家と與
 しと果敢に末を憑く。其の洪恩を復ひりあくなきも其の勸
 賞爵祿も影獲し乍麼何とせんともろの憂ひ限りなく目眩せむとの
 夜と曉ら次の日れ黄昏守直ホへ疲勞果て漸くかり来り光中を
 疎け閑室を招けよせつ穉のやと浴をば守直へ太息叻たてて昨宵
 より八方へ部々四五里の程へ隈もあく彼宛往方と索ねて追著る
 見忠を引入ら下膳澤の岡の邊を来つれども足も心も玉鐙の
 途の疲勞堪らうし樹の下菴ホ立より湯と草鞋と穿更をどく如此
 如此の主後兩人きの花曉黒時をんを過りてとをりて飲と潜る間

れば菴主の老僧小膝と進め問はくその人あり昨夕甲夜のみかり主後忠
 おんぞん老翁と尚弱きと兩個の武士忙げ柴門を叩て這菴室に進み
 俺們的程遠くぬ鎮守府さうの此へいひて死故あり道世せむと
 俄のよかれ導師を拜りて和僧を頼むとと授戒をぬひひとよりぬ
 いのさう。えん。隨の村落の草庵と守るるれ念佛の外は業へ
 さるのの知りしを明地は推辞しは頭を剃り賜とくとのそり
 又これと推辞をその度の許を死面魂は怖氣をく巳とを彼人の
 るに剃刀を磨しつとやつを西箇の頭顱を剃圓をりも偶と説示を
 るの度牒と授するも後これ免しと勸解し彼人達歡ひて
 智智の出家の智恵さう俗人よりと尊しこれが為の善智識の人も
 わんきと腰巾来つる大刀ども當坐の布施を引れりかて件の仕役が背負



乃る此を
 別と居け
 るも
 法にの
 本に何
 を
 あらま



前司殿のけりも後影ふんせぬとありぬとありふふひもぬ積
 事とくも人かやまを膝とせ額と集やくら相輝へども詮なし
 程は武彦昌之蒙二郎等なる九城中にありとひ士卒斬ふ廣綱の
 子と傳へて驚憂するのめく衆皆大く惜む物なり兎賊徑往既に亡びく
 大将光仲は恙なれが聊これ慰むる奈雜のふりありと也この故は光仲の凱
 陣とせざる速にこの城を毀棄せし下知り當下間中守直は義邦廣光を
 共は光仲を諫る往は藤原泰衡ホ亡びて鎮守府の將軍を拜せしめ
 めあたされ斯年久し廢城とありしを六郡の扞城より去るを今
 鎌倉へ請もつて忽地破却せしむる夏の宜なるありし千慮も亦一失
 ありともあはの儘は開退ぬ毀ては毀せし我は預るすのありしと辭等しく
 禁れば光仲笑く然もあは昔異朝後漢の忠臣司徒王允が辛くして賊臣

董卓と殊せしは長安の壘と都の塙と毀せし禍ありしと也又都塙ハ
 董卓が別邑なり萬歲塙と名つけり殺と積と財と藏と巨萬萬曾三
 十年の儲とせし処との後董卓が大将李傕郭汜誅せしと也又
 遂は長安を攻上りては彼都塙より根城とて竟は天下を覆せり譬ハ
 この鎮守府の敗城も彼董卓が長安郊外の塙の如し泰衡誅滅せし
 とは毀棄せしは一くは煙任終はこれと奪はく暴道時夏とて守りし
 果しく犄角の暴威を振へり今これを毀棄しは後亦賊の柵とならん
 かれは光仲の罪蒙るもこの城の毀へし皆是國家の光為に曩は厨川の柵を
 燔せし後の禍ありんすと也今公の物なりぬ兎徒の敗城を破却
 せしと也又を造ること鎌倉へ請もつてありんや其の此度の進退ありし利の
 為にせし只柳營のありんは民の塗炭を拯んとありんすと也

肝と釋諭せ義邦特は感服しく高論ありとも稱多かるて士交ハ立
 聚て城を毀て西三日塀を倒し塹を埋ふおのり勞を辞せりて速
 毀果たり既のち光仲ハ陣營を引拂く鎌倉へ入りあるは廣綱隱道一
 方あり假は義邦とて副將とて後陣は打立せ諸軍兵を引率しと想
 路とて夜は宿りあり武藏の栗橋の里小憩し光仲ハ遠
 間中守直と召近つけ和殿あり引別れて太田の莊へ立ち入り且見姫よ
 凱陣と前司殿の道世の趣と巨細を告より小三郎はこれと俟く鎌倉ハ
 在るの如しが和殿を還りて老黨を碎て取めりてとて
 廣綱の紀念あり大刀と角と遣しり畢竟守直太田へ還り光仲鎌倉ハ凱
 旋して又怎麼する物とてあるは次の巻は解分るとえと知え

文藝堂發兌房書目

考槃餘事	山平がし 東漢源謙校	一紙摺明朝綴 巾入今部四冊
題畫詩選	岡崎盧門著	全仕立全三冊
書畫皆宜	英疑氏撰輯	白紙摺明朝綴 巾入全部三冊
題畫詩剛	前川竹惠著	全仕立全三冊
書舖	漫華心齋鐵應橋比第五街	前川源七郎

